

## 第24回神奈川県小学校教育研究会社会科部会「川崎大会」

川崎市立小学校社会科教育研究会 研究主題

### ともに生きる未来を創造し、 よりよい社会の在り方を問い続ける社会科学学習

今年度は、よりよい社会の形成者を育むために、『概念的知識の獲得・活用』に焦点を当てた深い学びの実現を目指した研究を進めてきた。

#### 令和7年度 川崎市立小学校 社会科教育研究会の重点目標

#### 深い学びの実現に向けた一人一人が生きる社会科学学習

子どもが自ら学び、社会と関わり、主体的に行動する力を育むためには、概念的知識の活用が重要な役割を果たすと考えた。社会的な見方・考え方を働かせた問題解決的な学習のプロセス（社会の仕組みを理解する過程）を通じて、**概念的知識を獲得・活用**する中で、自分の考えを自由に表現しながら、お互いに高め合う集団をつくり、一人一人が生きる社会科学学習を目指していく。

#### 概念的知識とは…

概念的知識は単なる用語や個別の事実（個別的知識・事實的知識）ではなく、多くの事例に適応でき、社会の仕組みを読み解いていくために汎用的に使える、背景や関係性を含めた知識。

- ・「原因・結果の関係性を説明する知識」
- ・「より多くの事象にあてはまる知識」
- ・「目に見えない関係性を見出す知識」
- ・「より明確に社会的事象を見られるようになる知識」

具体的には

例：5年生 「自然条件と人々の暮らし」

長野県南牧村野辺山原のレタス栽培・出荷の事例⇒沖縄県の小菊の栽培・出荷にも適応できる市場の原理

#### 概念的知識のもたらす効果とは…

概念的知識があれば、子どもは社会の一部を「断片的に見る」のではなく、社会の仕組みを理解し、新しく出合った社会的事象について考えたり、何を選択すべきかの判断の拠りどころを獲得したりできるようになる。そうすることで、知識を基盤に新しい考えを創造し、新たな価値を生み出す力につながってくる。

#### 研究の方向性…概念的知識の獲得だけでなく、活用に向けての教師の関わり

概念的知識を理解するだけでは意味がなく、活用する場面を教師が意図的に設定する必要がある。教師が子どもに働きかけ（発問や問いの設定、資料、学習活動など）、子どもたちが概念的知識を使って考えたり、社会的事象との出会いを重ねたりすることが大切である。そうすることで個別的な知識が汎用的な概念的知識へと深化し、社会の仕組みの理解へと結びつき、社会的事象の意味や特色がより見えてくる。

#### 〇子どもから表出した瞬間をとらえる

教師が単元に臨む前に概念的な知識を単元のどの場面で獲得・活用できるようにするかを子どもの具体の姿で想定する必要がある。子どもは無意識のうちに概念的知識を使って問題を解決していることがある。しかし、自覚していないことが多いため、次に生かすことができないままになってしまう。「これって、前と同じで…」「きっと～ではないかな…」「だって～だもん」この瞬間を教師が取り上げ、無自覚から自覚へ促していく必要がある。教師が活用の機会を意図的に設け、活用できている姿を適切に評価することで、子どもは単なる知識の習得を超えて、自らの学びを次の行動に繋げる力を身に付けていける。

#### 〇概念的知識を獲得・活用する中で、社会の仕組みを理解したり、

#### よりよい社会を考えたりすることができる学習過程の設計

単元の問いの設定場面において問題意識や追究意欲を高めることで、子どもが見通しをもって進め、さらに学習活動を工夫することで、最後まで粘り強く学び続ける姿が期待できる。これらをベースにしながら、深い学びに向かうためには、教師が内容の系統性を考えながら概念的知識の獲得・活用ができる問いを含んだ学習過程を構想する必要がある。

※これらの考え方を軸として、顕在化している子どもの多様性や学年の発達段階を踏まえ、学年ごとに目指す子どもの姿や研究の視点を具体化して研究を進めてきた。（詳細は各学年の部会提案を参照）

## これからの社会を生きる子どもたちの資質・能力の育成に向けて、 これまで川崎市で大切にしてきたことは…

令和 2 年度の全国神奈川大会後、川崎市が取り組んできたことは、学習指導要領の内容をもう一度しっかりと捉え直し、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けてどのような授業を行っていけばよいのかということであった。ここ数年は特に学習活動の工夫に焦点をあて研究を進めてきた。その中での成果としては…

- ・単元の問いについて予想したり、学習計画を立てたりして学習を見通す活動
- ・子どもが学びの内容や方法、活動を振り返る時間の充実
- ・主体的に学ぶ姿（自己調整と粘り強さ）の追究
- ・学習活動時における学習環境の設定

など

その中で見えてきた課題としては・・・

「本当に深い学びの実現はできていたのか。」や「社会科は内容理解が大切な教科であるが、社会の仕組みを理解する学習過程や学習活動ができていたのか。」ということであった。

このような背景を踏まえながら、令和 10 年度の全国大会の実施も視野に入れ、今年度の川崎市では、「深い学びの実現に向けた一人一人が生きる社会科学習」という重点目標を設定して研究を進めてきた。（目指す社会科の目標としては以下の図を参照）

### 社会科教育の目標

豊かな人生



よりよい社会



公民としての資質・能力



概念的知識の獲得・活用



深い学びの実現のためには、「社会的な見方・考え方」を用いた考察…（略）…主として社会的事象の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことができる**概念等**に関わる知識を獲得するように学習を設計することが求められる。  
※「中教審答申より」

上位の目標である、よりよい社会をつくっていく、豊かな人生を歩んでほしいと願うウェルビーイングを目指すことは重要である。しかし、理想ばかりが宙に浮いた状態で現実味を帯びないこともある。普段の授業をベースに考えるとその下の項目、社会的な見方・考え方を働かせた問題解決的な学習の過程を通じて、**概念的知識の獲得と活用を繰り返し、公民としての資質・能力の素地を育成していくことが大切である**と考えた。

### 社会的な見方・考え方を働かせた問題解決的な学習

問題解決的な学習の充実にとどまることなく、社会科の授業を行う上での本質の部分ともいえる、**概念的知識を獲得できれば、深い学びに迫ることができるのではないか。逆に、深い学びを実現できれば獲得した概念的知識を活用しているとも言える**と考えた。深い学びを実現するためには、概念的知識を獲得し、それを活用できるような学習過程になっているか。これらが発揮されるような問いや発問、学習活動があるか、それが生まれるような教師の仕掛けがあるか。ということが大切になると考え研究を進めてきた。